

## 四国学院大学

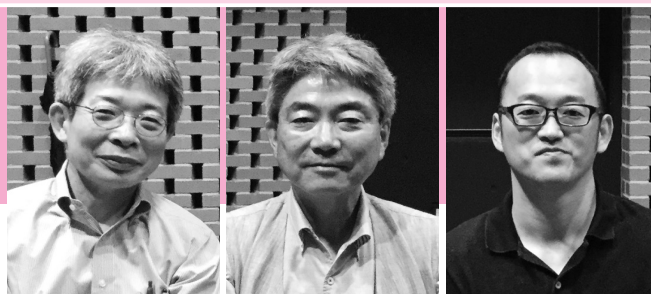
# グループワークを通じて 主体性・多様性・協働性を評価する「推薦入学総合選考」

左から

平田 オリザ 学長特別補佐

杉本 孝作 教学担当副学長

西村 和宏 演劇コースメジャーコーディネーター



四国学院大学は香川県善通寺市にある文学部、社会福祉学部、社会学部の3学部から構成される大学で、リベラルアーツ教育に特徴がある。2016年度入試より、グループワークを用いた推薦入学総合選考を導入した。グループワークでは、一つの事例として、当日、与えられた問題でディスカッションドラマ（討論劇）を創作する。受験生はグループに分かれて議論を進め、協力して時間内にドラマを創作して発表まで行わなければならない。なぜ、入試に演劇の要素を取り入れたのか。導入の経緯や意図等について、平田オリザ 客員教授・学長特別補佐、杉本孝作 教学担当副学長、西村和宏 身体表現と舞台芸術マネジメントメジャー（略称、演劇コース）メジャーコーディネーター（M・C）にお話をうかがった。

### 演劇コースの設置が契機 コミュニケーション能力育成が目標

2010年に、大阪大学リーディング大学院選抜試験において、演劇創作を取り入れた2泊3日の試験を行っていた平田教授のもとを末吉高明学長が訪れたことが契機となり、四国学院大学でもコミュニケーション能力の育成というカリキュラムの特色と連動した入試の導入についての検討が始まった。

四国学院大学のカリキュラムは、1年次に全員が共通の教養教育を学んだ後、2年次からそれぞれの学生が1つのメジャー（主専攻領域）と1つのマイナー（副専攻領域）から専攻を選んで学ぶ。メジャーの1つとして、2010年より「身体表現と舞台芸術マネジメント」（略称、演劇コース）が開設された。演劇コースの設置により、演劇コースをメジャーとして専攻していない学生にも、学生のコミュニケーション能力を伸ばすために、4年間を通じて演劇と関わる機会を設けている。演劇を通じて学生の感受性や表現力を磨くことでコミュニケーション能力の育成をめざす「ドラマ教育」は、四国学院大学の特色でもある。

一方、入試改革については、学内でプロジェクトチームが編成され、検討を重ねた結果、2016年度入試から「推薦入学総合選考」（以下、総合選考）として、まず指定校

制推薦入試においてグループワークを取り入れた試験を導入することとなった。こうした形式の入試について、平田教授は「これまでのように受験生を選ぶ試験ではなく、受験生の特質を見極めるための試験です。これまでのような長時間の勉強による努力を測るという、言わば知識の量を量る試験から、学ぶ仲間を選ぶ試験への転換です」と大学と受験生の双方にとって顔が見える試験を行う意義を説明する。総合選考導入以降、香川県内の高校での周知も進み、志願者数、入学者数も増加したことから、新しい入試方式は高校・高校生に対するメッセージの役割も果たしているという。

### 試験問題に内在する 議論を活性化させるための工夫

グループワークを行うグループは原則として6～8人1組である。受験生同士が、できるだけ初対面となるよう、可能な限り、同じ高校からの受験生は別グループにしている。総合選考はアイスブレイクから始まる。その後、説明文が配付され、試験の進め方についての解説の後に試験会場に移動して、そこでグループワークで取り組む問題が示される<図表1>。

「試験は会場に入った時から始まっています。試験会場

<図表1> 2017年度四国学院大学  
推薦入学総合選考（指定校S・公募制S）の流れ



（取材をもとにガイドライン編集部で作成。2018年度入試の出願にあたっては学生募集要項等で必ずご確認ください）

となる部屋には、机と椅子が置いてありますが、グループワークを進めるためのレイアウトも自分たちで考えます。椅子の並べ方のリーダーシップを誰が取るのか、ディスカッションドラマの創作を進めるためのホワイトボードをどう活用するのかといったことも評価のポイントです」（平田教授）と備品などの使い方なども評価されている。また、試験会場にはパソコンが2台設置されており、試験中に情報検索に利用することを認めていることも総合選考の特徴である。1つのグループに対して3名の教員が審査に当たり、さらにこれとは別に2名の教員が各グループ間で採点に差が出ないように全体を巡回する。採点結果をグループ間で話し合っって補正する場合もあるからだ。

総合選考で出題される問題には、さまざまな工夫がされている。例えば2016年度入試問題の1つでは、「3つある本州四国連絡橋のうち2本を廃止して1本だけを残す」という刺激的なテーマが題材となっており、受験生は香川県、徳島県、愛媛県、兵庫県、岡山県、広島県の各県代表となって、どの橋を残すかを議論するディスカッションドラマを創る。問題文では「自分の県に関係する橋を残すための意見を主張すると共に、他の県、他の橋についての確かな攻撃を加えてください。その攻撃に対して、反論も考えてください」と指示されている。この“攻撃”という強い言葉には議論を活性化させる目的があるという。

平田教授は「受験生に自由に議論をしてくださいと指示をしても、推薦入試ということもあり、また受験生の間で同調圧力が強いので、自分たちで議論の落とし所を探してしまう傾向があります」と話し、議論を活性化させるために敢えて“攻撃”という言葉を使用しているそうだ。

「どうすれば議論が活性化するか、そしてその過程をい

<図表2> 2017年度推薦入学総合選考 問題

これから皆さんには、ディスカッションドラマ（討論劇）を創ってもらいます。  
ディスカッションドラマというのは、文字通り、ディスカッション（議論）の様子をドラマにしたものです。人の出入りや動きなどは、あまり必要ありません。

<問題>

以下の題材で、ディスカッションドラマ（討論劇）を創りなさい。

2040年を目前に、四国に新幹線を通すことになりました。しかし、その経済効果を疑問視する声もあります。新幹線誘致賛成派、反対派、条件付き賛成派、フル規格派、ミニ新幹線派、無関心派などに別れてディスカッションドラマを創りなさい。

ディスカッションドラマですので、ディスカッションをして自分の意見を通すことが目的ではありません。各自が役割を分担して、どうすれば議論が盛り上がるかを考えて、最後に、10分前後のディスカッションドラマを創っていただきます。

60分しかありませんので、時間の使い方をよく考えてください。

<参考>

それぞれの主張に、一長一短があればあるほど議論は盛り上がりやす。たとえば新幹線は利便性は高いですが、地元の費用負担が大きく、ストロー効果も懸念されます。どの路線を通すかでも意見は分かれるでしょう。まず、役割分担を全員で考えましょう。

さらに、誰が、どの順番で、どのように発言すれば議論が盛り上がるかを考えてください。議論がかみ合うだけが目的ではありません。わざと脱線させたり、その脱線にヒントがあったりするかもしれません。

かに可視化するかを考えて出題しています。そのために敢えて対立する状況を作り出しています」（平田教授）

また、課題は<図表2>のようなディスカッションドラマ創作だけではない。2017年度入試では「香川県を舞台に浦島太郎を題材にして紙芝居を創りなさい」という問題が出題されるなどさまざまなパターンが用意されている。この紙芝居創作の問題文中では、「小学校1年生くらいを対象として想定してください」との指示もあるが、この意図について平田教授は「ただ単にディスカッションをするだけではなく、アウトプットを意識させるために対象を指定しています。ただ話し合うだけではなく、何のために話し合うのか目的を明確に設定する必要があります」と出題の意図を説明する。

演技力ではなく、主体性・多様性・協働性を評価

グループワークでは、個々の受験生を評価項目ごとに評価する（各評価項目は5点満点）。なお、課題がディスカッションドラマ創作の場合でも評価の際に演技力は問われない。平田教授は「発表や演技のうまい受験生が有利となる試験ではありません。ドラマを素材としているのは、フィクションの状況設定とすることで、より多様な意見が出て、議論を活性化させることが目的です」と演技力は評価

の対象ではないと話す。実際の評価項目は、年度によって異なる場合もあるが、「自分の主張を論理的、具体的に説明できたか」「ユニークな発想があったか」「他者の意見に耳を傾けられたか」「建設的、発展的な議論の進め方に寄与できたか」「タイムキープを意識し、議論をまとめることに貢献したか」「地道な作業をいとわずに、チーム全体に対して献身的な役割を果たせたか」といった内容である。

ところで、こうした形式の入試の場合、各評価者による評価の違いが課題となる。これについては、「総合選考を実施してわかりましたが、評価者による評価結果の違いはほとんどありませんでした。ドラマ創作を評価する場合でも、演劇を専門とする教員と演劇以外を専門とする教員の評価もほぼ同じ結果となりました」（西村 身体表現と舞台芸術マネジメントメジャー M・C）と評価者間での差が問題になることはないそうだ。その理由として、総合選考を導入するにあたって、評価を担当する教員のために在学生の協力を得て“模擬試験”を行い、参加した教員の意見を評価のポイントに反映させるなど、事前に総合選考のための準備を周到に行っていたこともあげられる。

また、午後に行われる個人インタビューは、グループワークを審査していた3名の教員によって行われるため、グループワークで十分に力を発揮できなかった受験生の性格や素質、個性などを見極めることができる。受験生は午前中に行われたグループワークのことを面接で質問されるため、あらかじめ面接での質問が想定される一般的な推薦入試の面接とは異なり、事前の準備がしづらい。そのため素の受験生の特徴を見ることができる。「グループワークの時にどのように考えたか、誰の意見が参考になったかなどを聞くことで、グループワークではあまり活発に意見が言えなかった受験生でも、その個性をキャッチアップして、個々の素質や個性をより深く理解することができます」（西村 身体表現と舞台芸術マネジメントメジャー M・C）

面接する教員と受験生は、午前中から同じ時間を共有していることで、自然な形で信頼関係が構築され、入試という場でありながら、和やかな雰囲気の中で個人インタビューが進むこともあるそうだ。

### プレカリキュラムとして初年次教育と接続 総合選考の入学者が授業の雰囲気を変える

総合選考での入学者は1学年の約3割にのぼる。そのため、総合選考を実施してから、授業の雰囲気も変わったと

言う。杉本 教学担当副学長は、「総合選考で入学した学生は、よく発表したり、演習の授業でリーダーシップを発揮したり、授業の雰囲気を活性化してくれています」と効果を実感している。「当初は懐疑的に見ていた教員も、総合選考で入学した学生の反応が、これまでの学生と違うことは授業を通してわかっています」と語るなど、総合選考に対する学内の理解も進んでいる。

また、初年次の必修科目「初年次基礎演習」は演習によって大学生活に必要な基礎的スキルなどを養うための科目である。授業ではディスカッションを通じてコミュニケーション能力を高めることを目的としているため、総合選考はそのプレカリキュラムとしても位置づけられており、入学者選抜と初年次教育が接続している。このほか、「ピア・リーダー制度」があり、上級生がピア・リーダーとなって新入生をサポートする。ここでも総合選考で入学した学生が活躍している。「1年生がスムーズに大学生活に馴染めるように支援するのがピア・リーダーの役割ですが、『初年次基礎演習』の授業運営の補助も行います。そこでは総合選考で入学した学生がピア・リーダーとなり、リーダーシップを発揮しています」（杉本 教学担当副学長）

効果測定については、個人の就学記録である「就学ポートフォリオ」が電子化されたことから、これらを利用してさらなる調査を進め、効果を検証していく予定だ。

### 学外のワークショップにも積極的に協力 地域の教育全体の活性化に貢献する

演劇コースが設置されており、総合選考を実施することから、学外からワークショップへの協力依頼も多い。これまでの香川県内の学校だけでなく、今年から、岡山県の複数の高校が合同で実施する地域連携講座でのワークショップにも全面協力する。参加する高校生が地域の課題を調べ、議論を重ねてディスカッションドラマを創作する4日間の講座は、課題や内容などの制度設計を高校の先生方と協力して作り上げた。こうした取り組みの目的は、地域の教育の活性化である。そこには、大学の発展には、地域の教育の活性化が欠かせないという考えがある。このように演劇の持つ力を活かす動きが広がり始めている。総合選考以外のトピックでも、「ドラマ教育」というカリキュラム上の特色と、その特色を活かした四国学院大学のこれからの活動が目される。